

いにしえ

古のロマンと謎

なぞ

～平安時代から受け継がれた心～

中仙地域はすでに平安の昔から信仰の厚い地域で、豊岡地区

「こぬまじんじゃ小沼神社」には平安時代の仏像「じゅういちめんかんのりゅうぞう木造十一面観音立像」（17

7 cm）と「しょうかんのりゅうぞう木造聖観音立像」（169 cm）が安置され、鎌倉時代

の木造彫刻像の「そうぎょうとうぶ僧形頭部」とともに、古さだけではなくそれぞれの時代の特徴を表す優れた仏教芸術として秋田県の指定文化財となっています。

豊川地区の「すいじんじゃ水神社」には、平安時代の青銅製の御神鏡が「線刻千手観音等鏡像（せんこくせんじゅかんのうとうきょうぞう）」と命名されて祭られています。この御神鏡は千手観音などを繊細で柔らかな秀逸な線描で蹴り彫りされた秋田県唯一の国宝です。

この国宝に勝るとも劣らない半円の古鏡「瑞花紋円鏡（ずいかもんえんきょう）」が上鷹野地区の「富岡家」に伝えられており、阿弥陀

三尊等がはつきりと蹴り彫りであらわされ、平安時代の長元4

年（1031）と製作年代も刻まれ秋田県指定文化財となっています。

こうしたことから、今から千年以上も前の平安時代に、この周辺ではすでに信仰の対象として、これらを受け入れるような風土を備えていたと考えられます。

ここで紹介するこの二つの古鏡は、江戸時代には秋田藩主佐竹氏の援助や保護と複雑に関わりながら現代につながっています。

秋田での佐竹北家は長野地区で始まった

佐竹義直（よしのぶ）は慶長7（1602）年に水戸（茨城県）から秋田に移封され、一族の北家（佐竹義廉・よしかど）を長野地区の紫島（むらさきしま）城におき、前北浦の48か村を統治させます。

その後、角館の芦名氏の断絶後の明暦2（1656）年に、北家は長野地区から角館に移りました。

中仙の鏡や仏像は、それより600年以上前・・・今から千年ほど前から人々の心の支えになっていたことがわかります。

ここでは、現代の私たちに いにしえ 古のロマンと謎を感じさせてくれる文化遺産を展示紹介します。



線刻千手観音等鏡像（レプリカ）

秋田県唯一の国宝である水神社の御神体「刻線千手観音等鏡像」のレプリカ。延宝5年に用水開墾中に鏡を発見し、土地の人々が祠を建てて祀ったことがはじまり。
（水神社所蔵）



瑞花文円鏡（レプリカ）

富岡家（中仙地域）所蔵「瑞花文円鏡」のレプリカ。宝永6年に富岡家の敷地で発見されたもので、享和2年に佐竹家へ召し上げられていたが、明治初期に当家へ戻った。秋田県指定文化財。

国 宝

せんごくせんじゅかんのんとうきょうぞう 線刻千手観音等鏡像

国宝の鏡は、青銅製で平安時代に作られたもので大きさは成人男性の手のひらサイズの八陵鏡^{はちりょうきょう}。

鏡面には蹴り彫り（けりほり）の高度な技術で千手観音などの仏尊が繊細に刻まれ「線刻千手観音等鏡像」と命名され、大仙市豊川の「水神社」に祭られ優れた仏教芸術として全国的に知られている。

■鏡の出土

延宝5（1677）年、水田開発のため玉川（現・わらび座東方の玉川左岸）から取水し、窪堰川（現・太田地域）までの下堰（水路）を開削しているとき、

三采女谷地（みうねめやち、現・中仙地域三棟）で地面から約1.5メートルで掘り出された。

■発掘者・注進者と藩主

横堀村（現・仙北地域横堀）の肝煎川原仁右工門の子・弥十郎という人。川原家ではこれを内神様として祭ったが、藩に差し出すようにと命があり水路開削の注進役（責任者）の草薨理左工門の子・伝吉が藩主の佐竹義処に差し出した際、「この鏡は堰を掘るときに出たのであるから、堰神として祀ように」と祭祀料として米3石を賜った。



普門寺宝生院と刻まれた石塔（水神社境内）

■鏡を祭る

翌、延宝6（1678）年、理左工門はこの地（現在地）にあった古い御堂を「米沢山普門寺宝生院」と名付け、白岩寺山（現・仙北市白岩）の修験・蓮寿院を別当として御神鏡として守護することになった。

■御神鏡を守る・・・そして「水神社」

明治初期、新政府が強制的に進めた廃仏毀釈のから御神鏡を守るために、それまでの寺を水に所縁^{ゆかり}のある神社「水神社」と改め、祭神を「水波能売命^{みずはめのかみ}」に今日まで御神鏡として崇め奉っている。



水神社の社殿・奥が国宝収蔵庫

■御神鏡のプロフィール

青銅製で表面を錫鍍金^{すずめつき}し、形は8つの突起を持つ「八陵鏡」。直径13.5cm、厚さ6mm、重さ525g。

鏡面には真中に仏具を持つ十一面四十手の千手観音の立像が蓮台に立ち、左の脇侍が功德天^{くどくてん}（別名吉祥天）、右は婆蘇仙^{ぼそせん}（婆藪仙とも）の像、周りに観音八部衆^{へんぶしゅう}の眷属で、これらを繊細に※蹴り彫り線刻している。

裏面は水鳥と蝶を配し、中央に紐をつける径2.1cmの半球体のツマミがあり、文様の間には次のような3行の文字が刻まれている。

「崇紀 仏師僧」

「大趣具主 延曆僧仁祐」

「女具主 藤源安女子」

※蹴り彫り：彫金の技法の一つ。鑿の刃先の一方を浮かせて蹴るようにして彫り、楔形を点線上に連ねて紋様を表すもの。

■御神鏡の伝来

嘉永7(1854)年に角館の儒者茅根恵風が奉納した扁額によると、宝暦3(1753)年、延暦寺の僧快寧が諸国巡行のおり、この米沢山普門寺を訪れ、「これは延暦15年(1181)藤原伊勢人の女が持っていたもので、鏡は2つあって、ひとつは長女安子姫、もうひとつは次女某姫が所持していたもの。両姫たちの疱疹と安産を祈るために彫らせ、清水寺に奉納し、そのひとつを坂上田村麻呂が東北平定の折、守り神として持参した」と伝えられている。

■二度の国宝指定

昭和13(1938)年、地方史研究の先駆者である武藤鉄城の働きと太田省司宮司の理解によって旧国宝保存法に基づく国宝指定となる。鏡の様相から「瑞花蝶鳥八陵鏡(ずいかちょうちょうはちりょうきょう)」と名称される。

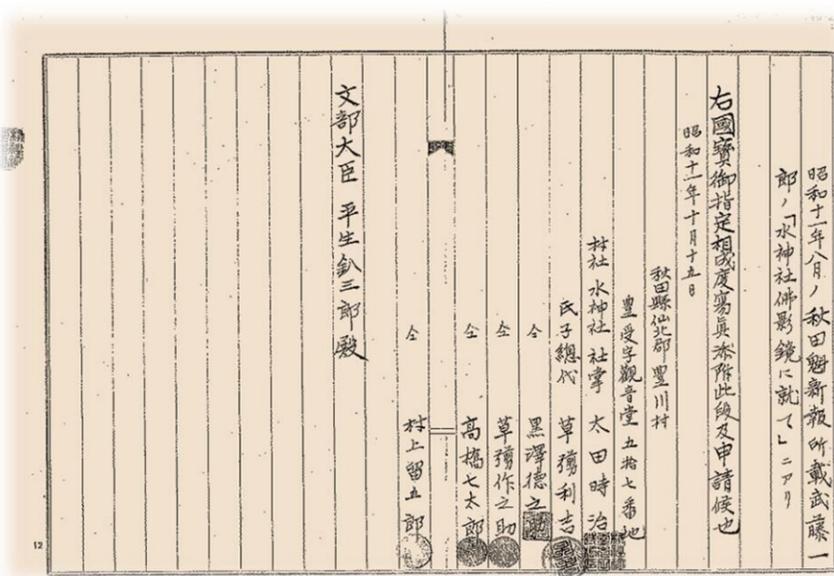
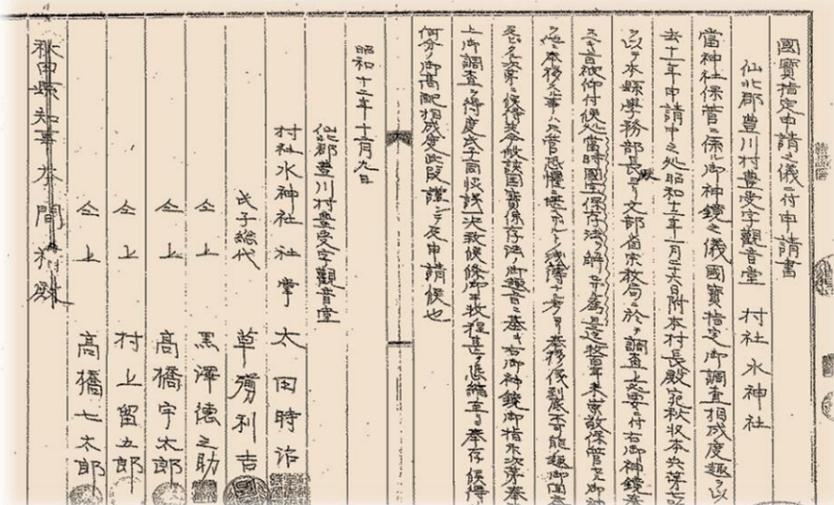
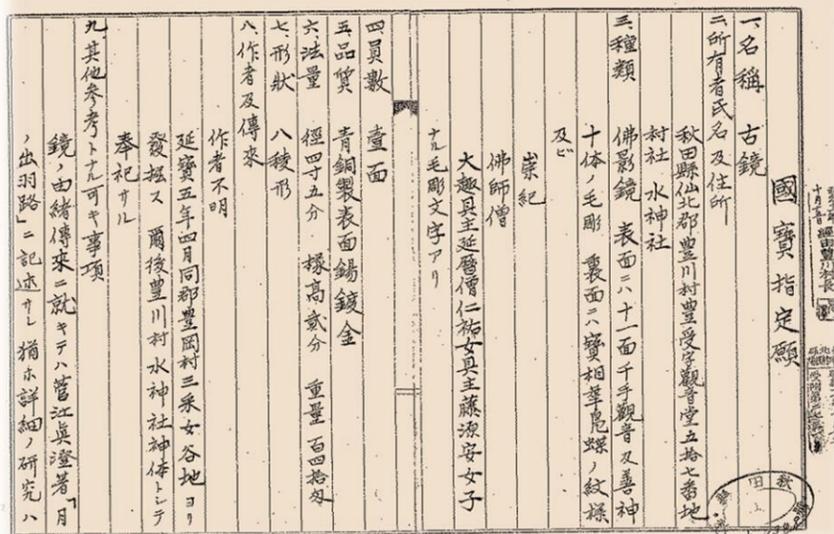
その後、昭和28(1953)年の文化財保護法の改法にともない国宝の再審査で再び国宝指定を受ける。2度目の指定の際、鏡の表面の蹴り彫りから「線刻千手観音等鏡像(せんこくせんじゅかんのんとうきょうぞう)」と改称された。

この国宝は、錫鍍金した鏡面に仏像を高度な蹴り彫り技術で表現した、美術史上、平安時代前期の仏教芸術を伝える貴重な文化遺産として評価されている。

国宝の一般公開は、毎年「水神社」の例大祭(8月17日)。

今回は、神社のご協力で神社所有の複製品(レプリカ)の展示です。また、中仙市民会館ドンパルにもレプリカ展示コーナーがあります。

「国宝指定願」(複写) 昭和11(1936)年10月15日付け



国宝指定：昭和13(1938)年 7月4日 (旧法律)
同：昭和28(1953)年11月14日 (新法律)

県指定文化財

ずい か もん えん きょう 瑞花文円鏡

富岡家の宗家に伝わる古鏡で、中央から二つに割れた半円の鏡で、鏡面の仏尊から「阿弥陀三尊等像あみださんぞんとうぞう鏡きょう」ともいわれている。

鏡面（表）に九尊の仏像が蹴り彫りされており、その一角に「長元四年（1031）七月十三日、旦主代公富岡、女旦主須未古公夏虫」と彫り込まれている。裏側には、唐草文を巡らし、中央のツマミは八葉の蓮弁をかたどった唐時代の代表的な図文で、平安時代前期のすぐれた仏教文化財として、往時の文化を今に伝えている。

■古鏡の出土・・・藩主佐竹氏と富岡家

この古鏡は、江戸時代の宝永6（1709）年2月に富岡家宗家（現当主・富岡喜芳氏）の屋敷の小溝から出土したものである。

その後、享和2（1802）に秋田藩主佐竹義和（9代）に召し上げられて、その代わりとして、富岡家には秋田藩のおかかえの江戸の絵師・狩野秀水がその鏡を忠実に描いた絵に藩主・義和の直筆で「鏡」と記した「鏡図」が下賜された。そして、秋田藩は富岡家に対して富岡家の子孫一代の間に一度だけは「鏡」の里帰り祭祀を許すことにしていた。



佐竹公から下賜された「鏡図」

明治3（1870）年2月に富岡家の願い出により「鏡」は富岡家に貸出されているが、廃藩置県への動きが加速したこともあり、「鏡」「鏡図」とも富岡家に保存されることになった。



直径：22.8cm 厚さ：0.9cm、重さ：750g

特筆すべきは、この「鏡」は寛政年間（1800頃）に松平定信（徳川吉宗の孫）が全国にある古宝物をまとめた「集古十集」に佐竹家蔵鏡として収録されている。収録された宝物のほとんどは、現在、国宝や重文に指定されている。

いにしえ

古のロマンと謎

～平安時代から受け継がれた心～

国宝の発掘場所

水神社

富岡家の古鏡の発見地

中仙支所

佐竹北家の最初の居城があった「紫島」

太田支所

「小沼神社」
平安時代の仏像

この参道の奥が「水神社」

